

12. アジア・アフリカ地域研究研究科

I	アジア・アフリカ地域研究研究科の研究目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	12- 2
II	「研究の水準」の分析・判定	・ ・ ・ ・ ・	12- 3
	分析項目 I 研究活動の状況	・ ・ ・ ・ ・	12- 3
	分析項目 II 研究成果の状況	・ ・ ・ ・ ・	12- 4
III	「質の向上度」の分析	・ ・ ・ ・ ・	12- 6

I アジア・アフリカ地域研究研究科の研究目的と特徴

本研究科は「総合的地域研究の推進」を目的として、高い水準の先端的研究にとり組んでいる。その特徴は以下の4点である。

1. 文理融合的・学際的な研究：さまざまな学問的バックグラウンドをもつ研究者が共同で研究を実施すると同時に、個々人も専門分野を超えた研究を志向している。生態、社会、文化、歴史が交錯する場である地域を総合的に理解するためには領域横断的なアプローチが必須である。
2. 基礎的な研究と応用的な研究の接合：環境保全や開発支援、自然災害、紛争解決など、地域がかかえる具体的で多面的な課題を解明して国際貢献を推進する。
3. グローバルな視野に立って比較を視野にいれつつ、個々の地域をより大きな世界のなかに位置づける研究を実施する。
4. 研究の方法論として、長期にわたるフィールドワークを重視し、現地の実情をふまえた実証的研究を実施する。

本研究科では、研究の国際化と国際協力を推進するために、海外に研究拠点（フィールド・ステーション）を設置し、海外の教育研究機関と多数の協力協定（MOU）を締結して連携体制を強化することも目標としている。また、競争的資金を獲得して若手研究者を海外に派遣して研究実績をつませ、人材を育成することにも取り組んでいる。アジア・アフリカ地域に関する情報資源を収集して研究に活用し、閲覧に供する努力もしている。

[想定する関係者とその期待]

国際的な共存を見据えて相互理解の推進を探求する地域研究は、国際化・グローバル化の時代に一層その必要性を高めている。本研究科の研究に関する主たる関係者や関係機関としては、国内外で地域研究に取り組む研究者や、教育研究機関およびシンクタンク、外務省関係の諸機関、NGO を含む国際的援助機関等をあげることができる。これらの関係者からは、文理融合的・学際的な研究を推進し、個々の地域の実態をグローバルな視野のもとに明らかにすること、そして、基礎研究と応用研究を結合しつつ、現代の諸地域がかかえる具体的な課題を解明し国際的な貢献をすることが期待されている。また、アジア・アフリカ地域において国際的な交流ネットワークを構築しつつ、関係諸機関のあいだの連携体制を強化するためのハブとしての機能を果たすとともに、研究情報を蓄積し、広く閲覧に供することも期待されている。

II 「研究の水準」の分析・判定

分析項目 I 研究活動の状況

観点 研究活動の状況

(観点に係る状況)

【研究実施状況】

本研究科では、東南アジア研究所等との協力体制のもとに研究拠点形成費等補助金（グローバル COE プログラム）「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」（平成 19～23 年度、総額：750,976,000 円）を獲得し、現地調査や共同研究の実施、若手研究者の育成、現地拠点の整備などとおしてアジア・アフリカ地域における研究拠点の形成につとめた。また、環境研究総合推進費「地域住民の REDD へのインセンティブと森林生態資源のセミドメスティケーション化」（平成 22～24 年度、総額：82,951,000 円）などを得て、環境問題など、地域が直面する課題を解明する研究を行ってきた。さらに、研究と教育を一体的に推進しつつ若手研究者を育成するために、若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム（ITP）「地域研究のためのフィールド活用型現地語教育」（平成 19～24 年度、総額：93,630,000 円）や JSPS 頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム「アジア・アフリカ地域を理解するためのトライアングレーション・プロジェクト」（平成 22～24 年度、総額：42,286,000 円）、研究拠点形成費等補助金（若手研究者養成費）「卓越した大学院拠点形成支援補助金」（平成 24～25 年度、総額：122,512,000 円）、JSPS 頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「アジア・アフリカの持続型生存基盤研究のためのグローバル研究プラットフォーム構築」（平成 24～26 年度、総額：66,220,000 円）、JSPS 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「グローバル化にともなうアフリカ地域研究パラダイム再編のためのネットワーク形成」（平成 27～29 年度、総額：82,009,000 円 [予定]）を獲得し、世界で活躍できる研究者を輩出する環境づくりを推進した。

平成 22～27 年度の期間に、これ以外の競争的資金で本研究科の教員が獲得した研究資金は、科学研究費補助金の採択数（採択金額）が 404 件（703,595,019 円）、受託研究等の受入数（採択金額）が 36 件（340,978,754 円）、委任経理金受入数（受け入れ金額）が 19 件（28,657,226 円）である（添付資料 1）。経年的にみると金額は横ばいかやや減少しているが、教員数（定員 30 名）を考慮すれば、非常に活発な研究活動を展開していることがわかる。

本研究科では、人間文化研究機構プログラム「イスラーム地域研究」の一環として研究科附属「イスラーム地域研究センター」を平成18年度に設立し、「イスラーム世界の国際組織とグローバル・ネットワーク」（第1期：平成18～22年度、第2期：平成23～27年度）に関する研究を実施した。同センターは平成24年度には世界第二位の規模を誇るウルドゥー語コレクションを購入して拠点事業を発展させた。さらに本研究科では、人間文化研究機構プログラム「現代インド研究」の中心拠点として研究科附属「現代インド研究センター」を平成22年4月に設置し、「現代インドの生存基盤・社会・政治の動態」を解明する研究を実施して（第1期：平成22～26年度、第2期：平成27～31年度）、共同研究の実施と若手研究者の育成を通して研究拠点形成とネットワーク構築に努めた。

本研究科の教員は、多数の研究業績をあげている（添付資料 2）。また、国内外の学会や研究組織の役職をつとめ、国際的な研究活動の推進に貢献している（添付資料 3）。

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

本研究科は、関係者から上記の期待を受けているが、研究拠点形成費等補助金（グローバル COE プログラム）や、多くの科学研究費補助金などの競争的資金を獲得して（添付資料 1）、文理融合的な地域研究と、基礎研究を応用研究に接合する研究を強力に推進し、また、JSPS の若手研究者海外派遣プログラムなどを活用して若手研究者を育成している。さらに、研究科附属「イスラーム地域研究センター」や「現代インド研究センター」の活動

をとおり、研究拠点形成と国際的ネットワーク構築を実現しており、国内外の学会において重要な役職を務めて国際的な研究の発展に貢献している（添付資料 3）。こうした本研究科の研究活動は、文理融合的・学際的な研究の実施、国際的な学術拠点とネットワークの形成、研究情報の蓄積・発進を推進した点において関係者の期待を上回る、と判断できる。

観点 大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

（観点に係る状況）

該当なし

（水準）

（判断理由）

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

観点 研究成果の状況（大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。）

（観点に係る状況）

本研究科では「総合的地域研究の推進」を目標とし、領域横断的で文理融合的な研究にとり組んでいる。また、基礎的な研究と応用的な研究を接合しつつ、地域がかかえる多元的な課題を解明している。さらには、グローバルな視野に立って比較を視野にいれつつ、個々の地域をより広い世界のなかに位置づける研究も実施している。

合計30名の専任教員が所属する本研究科で実施されている研究は、地域的にもテーマのうへでも多岐にわたる。たとえば本研究科では「イスラーム世界の総合的・動態的把握」や「イスラーム政治思想の現代的展開」に関する研究を実施している。この研究は、研究方法の理論化を実現し、アラビア語原典の活用によって実証的な研究成果をあげており、イスラーム地域研究としても原典研究にもとづく中東研究としても高く評価されている（研究業績説明書・業績1）。

本研究科では、また、インドの民主主義体制下で発生する暴力的紛争の起源や、その進行プロセスと帰結を検証する研究を行っている。本研究は、暴力が生み出す政治的帰結に注目し、インドにおける民主主義と暴力の関係を解明した画期的な成果である（同・業績2）。

本研究科では、ベトナム戦争のときに韓国軍が行った虐殺行為に焦点をあてて、韓国とベトナムの両国でその事件がどのように報道・記憶され、そこにはどのような政治的、文化的な力学が働いていたのかを解明する歴史人類学的な研究も行っている。本研究は、社会的にも大きな意義があり、多くの新聞の書評欄で高い評価を受けている（同・業績3）。

本研究科ではまた、2011年にタイでおきた大洪水への対処という焦眉の課題に関する研究も行っている。洪水の発生原因や発生様態、被害状況、治水対策などについて、工学、農学、経済学、政治学、社会学など、多分野にわたるタイ人・日本人研究者が学際的・国際的な共同研究を実施した。この研究は、大洪水という具体的な問題を総合的に記録・分析し、そこから得られる重要な教訓を指摘した点で大きな社会的意義を有する（同・業績4）。

さらに本研究科では、アフリカの野生チンパンジーと人間の共存関係を対象として、自然科学者が行ってきた生態学的・保全学的な研究に、古文書や古い写真資料を利用する歴史学的手法や、紛争に関する社会学的なアプローチといった人文社会科学的な研究方法を接合する研究を実施し、新しい学問領域を開拓するものとして高く評価されている（同・

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科

業績5)。

本研究科では、放牧地や家畜をめぐる民族間に争いがおきている東アフリカ牧畜社会において、個人レベルの行為のあり方を詳細に解説し、それを親族や友人関係、民族、国家といったさまざまな分脈に位置づけて分析する研究を実施し、民族集団間の戦争と平和の動態に関する理解を大きく前進させたとして非常に高い評価を受けている(同・業績6)。

本研究科の教員はこうした研究業績によって、多くの賞を獲得している(添付資料4)。

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

本研究科は、国内外で地域研究に取り組む研究者や教育研究機関、およびシンクタンク、外務省関係の諸機関、NGOを含む国際的援助機関等から、文理融合的・学際的な地域研究を推進すること、また、基礎研究と応用研究を結合しつつ、現代の諸地域がかかえる具体的な課題を解明し国際的な貢献をすることを期待されている。本研究科が「総合的地域研究の推進」を目標として多くの研究成果をあげ(添付資料2)、その業績に対して、さまざまな賞を受賞するというかたちで外部から高い評価を受けている(添付資料4)ことを考慮すれば、本研究科の研究成果は、関係者の期待を上回る、と判断できる。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

本研究科では、研究拠点形成費等補助金（グローバル COE プログラム）などを獲得してアジア・アフリカにおける地域研究の推進と拠点形成につとめてきた。また、人間文化研究機構プログラム「イスラーム地域研究」「現代インド研究」の一環として二つの研究科附属センターを設立し、研究拠点形成とネットワーク構築を実施してきた。第1期中期目標期間中に本研究科が海外の教育研究機関とのあいだで締結した交流協定は10件だったが、第2期にはさらに18件を締結し、合計35件となった。また、JSPS 科学研究費補助金など、多くの競争的資金を獲得して活発な研究活動を実施し、また、環境研究総合推進費などを得て、環境問題など、地域が直面する具体的な課題を解明する研究を推進してきた。若手研究者を海外に派遣して研鑽をつまさせる資金も獲得し、若手研究者の育成も行っている。さらに本研究科の教員は、国内外の多くの学会や研究組織の重要な役職を務めて、国際的な研究活動の発展にも貢献している。すなわち、第1期中期目標期間の終了時と比較して、本研究科の活動状況は、大きく進展している。

(2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

本研究科の教員は「総合的地域研究の推進」を目標として、文理融合的・学際的な研究にとり組むとともに、基礎研究と応用研究を接合して地域がかかえる多面的な課題を解明する研究を実施してきた。教員の研究地域と研究テーマは多岐にわたるが、たとえば、「イスラーム世界の総合的・動的把握」の研究や「イスラーム政治思想の現代的展開」に関する研究、「インドにおける民主主義と暴力の関係」に関する研究、「ベトナム戦争時におこった虐殺の記憶」に関する研究、「2011年にタイでおきた大洪水に関する学際的・国際的な共同研究」、「野生動物の生態学・保全学に社会科学的方法を適用する研究」、「東アフリカ牧畜社会における戦争と平和の動態に関する研究」などを、本研究科の教員が実施してきた「総合的地域研究」の代表例としてあげることができる。こうした研究業績に対しては外務大臣表彰や紫綬褒章など、第1期中期目標期間にはなかった多くの重要な賞が与えられ、第三者からも高い評価を受けている。すなわち、第1期中期目標期間の終了時と比較して、本研究科の研究成果には、大きな進捗がみられる。